様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月２２日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５２０１１１
研究課題名（和文）　関西陶磁技術の成立をめぐる膳所焼を中心とした美術工芸史・考古学の総合研究
研究課題名（英文）　Integrated research on history of art craft and archaeology that studies on Zeze-Yaki to clarify a process of establishment of Kansai ceramic technology

研究代表者
佐藤　隆（SATO TAKASHI）
財団法人大阪市文化財協会・文化財研究部・係長
研究者番号：５０３４４３６２

研究成果の概要：
本研究では、滋賀県大津市の膳所焼大江窯跡の発掘調査を実施し、焼成室の全長が約 8mで、6 室の連房式登窯を検出した。その成果を伝世品・古文書などとあわせて検討した結果、17 世紀に操業したと考えられることや、窯の規模が同時期の瀬戸・美濃や肥前に比べて小さく、茶入・茶碗といった茶器を専焼する高級品志向であったこともわかった。こうした窯が、窯体構造や窯道具の組成などから、瀬戸・美濃系の技術伝播によって生まれたことが明らかとなり、関西の近世窯業が成立する状況を知る重要な手がかりとなった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	900,000	0	900,000
２００７年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２００８年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	750,000	4,150,000

研究分野：日本考古学・陶磁史
科研費の分科・細目：美学美術史
キーワード：考古学・美術工芸史・膳所焼・京焼・登窯

１．研究開始当初の背景

染織・漆工などの美術工芸品と比較すると、現在の陶磁器研究は発掘調査に基づく考古学の成果が反映されることがきわめて多い。しかし、これまで発掘調査が盛んに行なわれて実態がよく把握されている肥前や瀬戸・美濃などの大生産地に比べて、江戸時代前期、17 世紀の関西における窯跡の発掘調査はほとんど行なわれておらず、伝世品を中心とした美術工芸史研究のみに偏っていた。したがって、関西の陶磁技術がいつ、どのような状況で成立し展開したかについては、充分に解明されたとは言い難いのが現状である。

製品の場合、当時の流行や発注側の意向などから異なる生産地のものを模倣することが往々にして行なわれるが、それに対して、生産痕跡（窯跡・窯道具）は生産する側（陶工）の技術体系を濃厚に反映しており、窯業技術の解明にとって重要な資料となる。こうした点から、当該期の関西における窯跡の発掘調査を行なう学術的な価値は高いと考える。

本研究を実施するまでにも、研究代表者である佐藤をはじめ、研究分担者（連携研究

者）・研究協力者は、大坂・京都などの消費地や、信楽・丹波などの生産地といった周辺地域の発掘調査成果を中心に、江戸時代前期における関西への陶磁技術の導入に関する研究を行なってきた。

こうした活動の結果、京焼をはじめとする関西で用いられる登窯の技術が、窯道具の類似や文献の記載からおもに瀬戸・美濃から伝わってきたことについてはほぼ明らかになったと言えよう。しかし、さらにそれが瀬戸・美濃のいつの段階の窯からのものかを絞り込む手がかりを得るには、窯構造の特徴や窯道具の組成を詳細に比較することが不可欠であるということも明らかとなった。

２．研究の目的

本研究では、江戸時代前期において関西の窯業技術が成立する実態を解明するため、次のような成果を得ることを目的とした。

まず、伝世品や古文書などから 17 世紀に操業していたことがわかり、京焼と似た状況で技術導入が行なわれたと推定される膳所焼大江窯を研究対象に発掘調査を行ない、窯構造・窯道具といった陶磁技術に関する考古学的資料を得て、それを他地域の発掘調査成果とあわせて検討し、膳所焼がどのような技術系譜のなかで成立したかを明らかにすることである。

次に、美術館・博物館等が所蔵する膳所焼の伝世品や古文書の調査を行ない、このやきものの操業年代や、当時から現在に至るまでどのような評価を得ていたかに関する手がかりを得ることである。

こうした活動をとおして、考古学・美術工芸史の両分野にまたがる研究を進めることにより、膳所焼の関西陶磁における位置づけや、京焼などを含めた関西の近世窯業の成立過程を明らかにできるのではないかと考え、「膳所焼大江窯学術調査研究会」を組織して活動した。

江戸時代前期の関西において、京焼をはじめとする陶磁技術がどのように導入され発展したかについては、これまでおもに伝世品や伝承を対象とした美術工芸史的側面から研究が進められてきた。しかし、技術系譜の比較検討を行なう上では、製品の発注内容に影響を受けない窯構造や窯道具といった資料を対象にする考古学的研究がより有効であり、窯跡の発掘調査が不可欠であると考えられる。本研究の発掘調査はこうした問題意識に基づいている。

３．研究の方法

(1)上記の目的を達成するため、まず 2006 年度には、膳所焼大江窯跡が所在する大津市大江二丁目の若松神社において、発掘調査の実施に向けて予備調査としての現状確認および、地権者である同神社との協議や、滋賀県・大津市教育委員会との調整を行なった。そうした準備の後、2 日間の日程で測量調査（第１次調査）を実施した。

測量調査での作業は、第一に現状の窯跡の遺構を観察しながら、平板によって地形およびコンターラインを実測することである。この作業によって、窯の範囲や残り具合を推定した。

第二には、窯跡の周辺において廃棄された陶片・窯道具が多量に集積されている場所、いわゆる物原の存在を確認することである。

こうした結果に基づき、次年度の発掘調査で設定する調査区の位置を検討した。

(2) 2007 年度には 11 日間の日程で発掘調査（第 2 次調査）を実施した。

調査区は、窯体が露出していた部分を中心に 3 箇所、および前年度の測量調査の際に陶片・窯道具が分布することを確認した周辺部分に 3 箇所の計 6 箇所（約 25 ㎡）設けた。

調査期間中には報道機関に現地を公開し、一般向けの現地説明会も行なって遺跡の重要性を周知した。

(3)現地調査の終了後は、図面・データの整理や出土遺物の基本的整理・実測・写真撮影を行なった。2008 年度にかけて、現地調査の成果と、並行して進める伝世品・古文書の調査成果とを研究参画者間で意見交換を行ないながら総合的に検討し、報告書の作成を行なった。

４．研究成果

(1)発掘調査で明らかにできた検出遺構・出土遺物については以下のとおりである。

窯体部分には測量調査（第 1 次調査）の知見や露出していた部分を手がかりにして 3 箇

所（第1〜3調査区）、周辺部分には3箇所（第4〜6調査区）の、計6箇所（約25㎡）の調査区を設けた。

第1調査区では窯尻の煙出し、第2調査区では窯の中程にある2列の狭間、第3調査区では焼成室1列目の狭間と燃焼室から焚き口までを検出し、連房式登窯であることを確認した。露出して見えていたのは第1・2調査区の北側の窯壁で、当初は掘削後ほどなくして床面に達するものと考えていたが、遺構の残りが予想以上に良好で、狭間孔の上部までが確認できるほどであった。また、失われていると考えていた燃焼室や焚口が検出できたことも、窯の全体規模を明らかにできたという点で大きな成果である。

焼成室は全長が約8mある。1室の大きさは、第1房が手前にすぼまる以外は、横幅が約1.8m、奥行きが1.0m強で、6室と推定できる。各室の南側には出入口の跡が見られる。また、手前側には薪を投入する火床がある。床面は10°前後の緩やかな傾斜をもち、全体の高低差は約1.8mある。表面には粘土を貼っているが、砂で修復した箇所も多い。狭間孔から火床にかけては何度も粘土で修復され、わずかに段をなすように見える。当初の状態ではこうした段がなかった可能性もある。また、特筆すべきは、第1房の中央の巨大な狭間柱で、瀬戸・美濃大窯の分炎柱の系譜を引くものである。

周辺部分では、窯のある斜面より一段低い平坦部に設けた第6調査区において、人為的に地形を改変した痕跡が認められた。遺構は検出できなかったが、さらに調査範囲を広げれば、この平坦部に工房の遺構が見つかる可能性が高い。物原は南側の斜面にあったがすでに失われたと考えられ、以前にこの南の道路工事において窯道具が出土している。

出土遺物には製品・窯道具・窯体片（天井や壁、床などの破片）がある。

製品には、釉薬を掛けて本焼きしたものと本焼き前の素地とがある。茶入・茶碗・皿・灰器などが焼かれており、特に茶入や茶碗といった茶道具が目立ち、窯の規模が同時期の瀬戸・美濃や肥前の窯に比べて小さいことから、大量生産ではなく高級品を志向する窯であった。

窯道具には、匣鉢・同蓋、輪ドチ、馬爪焼台などがある。窯体片は粘土を重ねて貼り付けたもので、レンガ状に切りそろえたものは見られない。

(2)上記の発掘調査とその後の資料整理、および並行して進めた資料調査の成果から、研究参画者が各自の担当分野や問題意識に基づき、こうした成果をもとにさまざまな視点から考察を行なっている。考察を進めるにあたっては、研究会を適宜開催したり、資料調査の機会を利用して研究参画者間での理解の共有をはかった。

発掘調査で明らかとなった窯構造や窯道具の組成などの特徴からは、大江窯が瀬戸・美濃の技術の流れを引くことが予想された。そのため、まず肥前の唐津窯（割竹形連房式登窯）が美濃へ導入され、さらに美濃の周辺窯や、瀬戸の窯へ広がっていった過程について、これまでの理解を『瀬戸大竈焼物並唐津竈取立之来由書』や『森田久右衛門江戸日記』といった文献の記載を引きながらまとめておく必要があった。

さらに、各地域の窯構造の変遷をたどりつつ従来の狭間構造の概念を再検討するといった作業を行ない、大江窯の技術系譜が瀬戸・美濃の技術によって営まれたことを確認し、その年代について17世紀第1四半期と推定した。

製品の組成・特徴の検討においては、高取焼との共通点が多いことに着目し、美濃の窯ヶ根1・4号窯の製品との類似性とあわせて開窯年代を17世紀第1四半期、なかでも元和年間（1615〜24）の頃に絞り込んでいる。また、数少ないながら出土した京焼風の碗製品の存在から、延宝6年（1678）に土佐の陶工である森田久右衛門が訪れた段階では操業はされつつも衰退傾向にあり、ほどなく閉窯したと推定した。

これまで膳所焼の伝世品といえば、深い褐色を呈する鉄釉の茶入や水指がほとんどであった。今回の出土陶片には、そうした製品以外にも灰釉の菊皿や向付などが少なからず含まれ、膳所焼のもつイメージはより幅の広いものとなった。小さな素焼き陶片に描かれた銹絵の文様に目を留めたことが、この窯と森田久右衛門とを結び付ける貴重な手がかりとなったことも特記しておきたい。

また、特に製品のなかでも焼締め陶器に注目し、他地域の生産地での製品や消費地での出土資料と比較して考察が行なわれている。茶陶を主として生産したと考えられる大江窯の製品のなかで、違和感をもたれるのが擂鉢の存在である。こうした高級品志向の窯でも窯の位置によっては雑器を焼くことがあったとの評価もあるが、一般的な擂鉢との形態や法量の比較をとおして、一見雑器と考え

てしまいがちなこの器形を茶器として評価したことは、この窯の性格をより鮮明にするうえで重要な見解である。

タタキ文をもつ平鉢については類例を集成し、用途を炭手前のための灰器と結論づけた。今回の出土陶片は、一般的な窯跡の発掘調査と比べると数量が少ないが、わずか1点の灰器をとっても、信楽焼をはじめ、他のやきものとの接点が見いだせる。

古文書からの検討では、大江窯の開窯および閉窯の年代の推定が行なれ、それぞれ重要な見解が示された。

まず開窯期については、『駿府御分物道具帳』に記載される「勢田焼壺」を大江窯の製品とするならば、元和2年（1616）4月以前には操業していたことになる。ただし、生産が軌道に乗るのは元和7年（1621）以降の菅沼定芳の時代であり、「膳所焼」と呼ばれるようになったのもこの頃とする。

閉窯期については、貞享5年（1687）の証文に「壺屋惣左衛門家屋敷」に関して若松神社に替地が与えられたという記載があり、窯は衰退、または閉窯していたが、なお、若松神社境内に残されていた状況を表すとみる。また、享保7年（1722）には家屋敷が取り払われていることが明らかとなった。

加えて、膳所焼が、膳所藩の御用を主体として、藩に関わる人物との個人的な縁故によって入手されるものであり、商業流通に乗らない窯であったと論じた点は、窯の規模や製品の性格とも合致している。

上記の成果をもとにすると、膳所焼大江窯は、元和年間（1615～24）の頃に瀬戸・美濃の技術を導入して開窯し、茶陶を専焼してさまざまな優品を世に出し、貞享年間の頃には操業を終えていた窯であると言える。『森田久右衛門江戸日記』に記された「大江の窯」はまさしくこの窯であった可能性がきわめて高い。

(3)本研究は、これまで伝世品や文献、わずかな採集資料などをもとに研究されてきた膳所焼を、発掘調査という手段を取り入れることで、これまで以上に深く理解しようとする初めての試みである。それは、窯構造や窯道具といったやきものの技術を主軸に据え、これに従来の伝世品や古文書の研究をからめて進めるという手法であった。先でも述べたとおり、製品の場合、当時の流行や発注側の意向などから異なる生産地のものを模倣することが行なわれることから、陶磁技術の解明にとっては、生産痕跡（窯跡・窯道具）を中心に検討する本研究のような手法が有効であることが明らかとなった。

関西窯場の陶磁技術の流れを解明するうえで、中心的存在となる京焼の窯跡の発掘調査例が少なく、特に窯構造に関する情報がないに等しい状況は大きな問題である。しかし、今回の大江窯の発掘調査によって、瀬戸・美濃から技術が導入されて連房式登窯が成立するという江戸時代前期の実例を具体的に提示できた。要素として不可欠でありながら、これまで資料がほとんど得られていなかった窯構造の伝播を初めて明らかにできたという点で大きな意義をもつ。

また、18世紀に操業した堂島窯や古萬古窯の窯構造は、17世紀にすでに瀬戸・美濃から京焼に伝わっていた技術が、さらに周辺地域に伝播することで成立した例としてこれまでも取り上げてきた。今回、瀬戸・美濃の窯構造の変遷をあらためて整理することで、京焼への伝播の時期が大江窯の開窯とさほど変わらないことも明らかになり、京焼成立期の状況を推察することもかなり可能になったと言える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

①岡佳子、「茶会記にみる「今ヤキ」と「京ヤキ」」、『藝能史研究』、第280号、1-16頁、2008、査読有

②尾野善裕、「三田焼三輪明神窯の開窯とその戦略」、『学叢』、第29号、25-39頁、2007、査読無

③岡佳子、「森田久右衛門のみた関西の諸窯」、『第8回四国城下町研究会発表要旨・資料集四国・淡路の陶磁Ⅳ―尾戸窯の経営とその周辺』、145-158頁、2007、査読無

④尾野善裕、「京焼の技術系譜―特別展覧会「京焼」によせて―」、『陶説』、通巻644号、26-35頁、2006、査読無

〔学会発表〕（計3件）

①佐藤隆・尾野善裕・畑中英二・西田宏子・岡佳子・伊藤嘉章、「膳所焼大江窯の調査」、日本考古学協会、2008年5月25日、東海大学湘南キャンパス

②岡佳子、「森田久右衛門のみた関西の諸窯」、第8回四国城下町研究会「四国・淡路の陶磁Ⅳ―尾戸窯の経営とその周辺」、2007年9月8日、高知市

③平尾政幸・佐藤隆・尾野善裕、「考古学による“京焼”研究の最前線」、東洋陶磁学会・歴史土器研究会・京都国立博物館共催シンポジウム、2006年10月29日、京都国立博物館

〔図書〕（計2件）

①佐藤隆・尾野善裕・畑中英二・伊藤嘉章・岡佳子、『膳所焼大江窯の研究』、研究代表者（佐藤）、2009、110頁

②尾野善裕編著、『特別展覧会図録　京焼―みやこの意匠と技―』、京都国立博物館、2006、

384 頁

〔その他〕
2007 年度の発掘調査成果を紹介する記事が毎日新聞・読売新聞・京都新聞・中日新聞の4紙に掲載された。

６．研究組織
(1)研究代表者
佐藤　隆（SATO TAKASHI）
財団法人大阪市文化財協会・文化財研究部・係長
研究者番号：５０３４４３６２
(2)研究分担者
伊藤　嘉章（2006・2007）（ITO YOSHIAKI）
独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館・学芸部企画課・企画課長
研究者番号：８０２１３０９９
岡　佳子（2006・2007）（OKA YOSHIKO）
大手前大学・総合文化学部・准教授
研究者番号：５０２７８７６９
尾野　善裕（2006・2007）（ONO YOSHIHIRO）
独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館・学芸課・主任研究員
研究者番号：４０２８０５３１
西田　宏子（2007）（NISHIDA HIROKO）
慶應義塾大学・文学部・非常勤講師
研究者番号：００４４５４５４

(3)連携研究者
伊藤　嘉章（2008）
独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館・学芸部企画課・企画課長
研究者番号：８０２１３０９９
岡　佳子（2008）
大手前大学・総合文化学部・准教授
研究者番号：５０２７８７６９
尾野　善裕（2008）
独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館・学芸課・主任研究員
研究者番号：４０２８０５３１
西田　宏子（2008）
慶應義塾大学・文学部・非常勤講師
研究者番号：００４４５４５４

(4)研究協力者
西田　宏子（2006）
根津美術館・学芸部長
畑中　英二（2006～2008）
財団法人滋賀県文化財保護協会・主任